

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



被災地に咲くアカツメクサ(陸前高田市)
6月、研究生は東日本大震災の被災地を訪れ、様々な出会いをした。(4・5面) (写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録 真宗儀式の教相 ②・③
- ・ 研究生現地研修 “忘れないでください” ④・⑤
- ・ 大谷派の近現代史 「ヤスクニの闇へ」 ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

間違いはあるよ、人間なもの

「給湯状況を点検してください」風呂の排水口栓を閉めたつもりで閉め忘れると、お湯は湯船に溜まらず漏れ続く。すると五分後、この音声ガイドが知らせてくれる。お湯は流出し、私の口からは愚痴が流出する。連れ合いに「また、やったなあ。何遍同じことやっとる」と。そこにいた娘曰く「お父さん、間違いはあるよ、人間なもの」。この言葉に「本当だねえ」と頷けぬ自分に悶々としたことがある。

先回の講義で竹橋太氏の「われわれは間違えるのです」本誌(二面)という指摘によってフツと思いきされた。

昨今の報道から流されるイスラエル戦闘には始まり、集団的自衛権の閣議決定、憲法改正論を見聞きするたび、テレビの前で世の愚行を厳しく批判するが、自分の問題には中々気づけない。靖国問題も同じで、問題の本質もわからぬまま問題と言っている自分が、いっこう問題にならないのである。

今年の平和問題公開講座では、あらためて「靖国神社とは何か？」について、長年にわたって靖国問題に向き合っておられる辻子実氏を招き御講義いただいた。

本誌(六・七面)では紹介できなかったが、講座の前に研究生を対象とした特別学習会の中で「平和を願うのであれば平和を肯定する教義ばかりを探してはダメだ。宗教者は自教団の教えの言葉を使って、現代社会においてどのような戦争協力をし得る可能性があるかを認識すべく、具体的に想定しておかなければならない」と問題提起された。

「時代社会の付託に応える」というような真面目さは、時として更なる悲しみの連鎖をもたらす道具と化す危うさを内包してはいないか。戦争のできる「普通の国」となったとき、戦地に赴くご門徒に、あるいは犠牲になった遺族に向けて、私ほどのような法話をするのだろうか。そしてその言葉はどのようなはたらきをもたらすのか。私にとって、今まで出なかったことのない課題である。「戦争は平和の名のもとにはじまる」が、私の日頃の在り方を問う。

「われわれは間違える」存在であり、栓を閉めたつもりでのダダ漏れの身は、かわることはない。

(主幹 荒山 淳)

講義抄録

2014年4月8日

〈研究生「教化研修」〉
「真宗儀式の教相」

竹橋 太氏
(本廟部出仕)

第13回



ブラジルに行ってきました

先日、儀式を通して、浄土真宗あるいは仏教について話をしてほしいという依頼を受け、ブラジルの南米開教区に行ってきました。今、ブラジルでは、特に知識人の間で仏教が大変な人気になっています。今後、一般の方々へも広がることを楽しみにしています。

その中で、日系ではないブラジルの若い人が何人も得度をしています。ある人に聞いてみますと「キリスト教的なものから逃げたくて仏教に入信した」と話していました。

わたしが考える仏教のイメージは、「完全な自由」ですが、それは「束縛されている」ということを知る「こと」によって得られる自由です。束縛されているということとを自分の中で理解して、その世界を生きられる、そういうことが「自由」であると考えます。

ある一面からは正しい答えがあったとしても、すべてにおいて完全に正しい答えというものは存在しないと思います。たとえば、「戦争は悪いものだ」という意見は正しいものでしょう。しかし、それを言うわれわれの態度によって、人間関係が分断されたり、それを絶対の正義だ

と言うことによって、さらに争いを起こすということも有り得るわけです。

われわれは間違えるのです。それを知らせるのが仏教だと思います。間違えるからこそ、絶対の善悪が無いからこそ、私たちは、自分で考え、行動し、失敗したら謝る、うまくいいたら感謝する。そうやって自分自身の人生を味わうことができるのではないのでしょうか。それが私の考える「自由」という言葉の意味です。

法話の基本とは

「マンネリズム」という言葉がありますが、実は「マナーリズム」です。作法として固まることよって意味を失い、ただの形式になるといことです。そうなると、その形をやるだけでよくなり、その形をいかにうまくやるかが問題になってきます。

そして、逆にそれが儀式の特長でもあります。形通りにやれば誰でもできる。僧侶がいて決まった形で儀式をするから、皆さん安心するのです。そういった儀式の形があるからこそ、法話も聞いてもらえるのです。

法話が大事だとよく言われますが、それは儀式の中だから法話ができるのです。

儀式の中で、場所を与えられているだけなのです。

また、その基本は「御文法話」（法話の後に御文）だと思っています。われわれが『御文』（聖教）を前にしてお説教をする。その内容を『御文』（聖教）で確かめるということ。要するに、自分の思いを語るだけでは感話になってしまいます。そうではなく、聖教の内容を確かめる、また聖教によって私たちの考えの内容を確かめるために法話をするのです。だから浄土真宗の基本は「御文法話」なのです。その基本は忘れないようにしていただきたいと思っています。

はだかの真実など存在しない

法要の中で経典を誦するのですが、親鸞聖人は「真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」（『真宗聖典』一五二頁）とおっしゃっています。『観経』や『阿弥陀経』だけでは浄土真宗にならないということ。三経はどのような関係にあるのでしょうか。

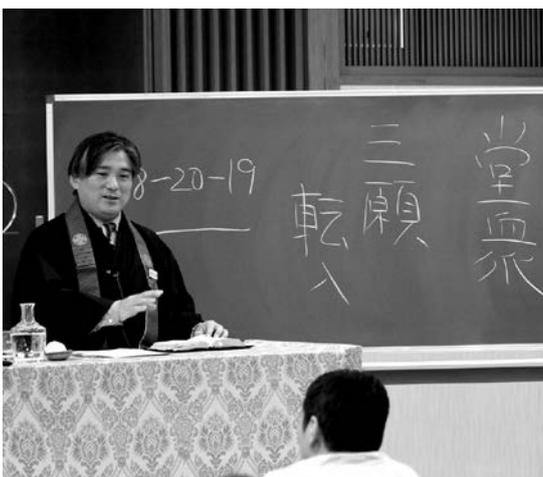
親鸞聖人は第十八願が『大経』をあらわす願、第十九願が『観経』の願、第二十願が『阿弥陀経』の願と、教学的に理解しておられます。

第十九願と第二十願、そこには、様々な功徳を修めて浄土に生まれようとすることや、自力の念仏が見られます。至心に、自力で、回向するのです。また、親鸞聖人は第十九願と第二十願を方便として位置付けておられます。

われわれは、方便ではなく真実さえあればいいと思っています。第十九願・第二十願は浄土真宗の救いとは違う、第十八願だけでいい、と考えてしまいがちです。しかし、方便が無ければ真実に着かないのです。

例えば、門徒さんのお内仏に写真などが飾ってあると「それは真宗ではない」と否定することがあるかもしれません。しかし、それは「わたしが分かった真宗」でしょう。私の善悪なのです。そして悪を無くせば善になる、と考えてしまいます。私の思うとおりの門徒を作ることが「浄土真宗」になってしまっています。

そうではなく、「なぜそうになっているのだろう」というところからスタートできるといことです。はだかの真実などありません。「真宗はこうあるべきだ」と善悪で話をするのではなく、そこに何





『阿弥陀経』だけでも儀式は成り立つのか

が現れているのか、それに触れて、それを方便として、お念仏の教えに出あっていく。そういう幅を示しているのが、第十九願・第二十願です。そしてその二つの願を照らすことにおいて第十八願も我々の前に存在しうるので。

親鸞聖人は第二十願に対し、『浄土和讃』で「果遂の願によりてこそ 釈迦は善本徳本を 弥陀経にあらわして 一乗の機をすすめる」（『真宗聖典』四八四頁）とおっしゃっています。『大経』の第二十願（果遂の願）は『阿弥陀経』となつて、『大経』のすがたを現しているということなのです。

仏智疑惑は必然である

われわれが儀式で『阿弥陀経』を誦読するということも、『阿弥陀経』を単独で、という意味ではありません。そこには、『大経』があるのです。そういう教相がなければ、『阿弥陀経』だけで儀式はできません。『観経』も同じですね。

親鸞聖人は『浄土三経往生文類』で「観経往生」（『真宗聖典』四七一頁）とは、「修諸功德」つまり、いろいろなよいことをして、浄土に往生しようとするものだとおっしゃっています。そして、それは本当の他力の信心ではないとおっしゃっています。

また、「弥陀経往生」（『真宗聖典』四七三頁）とは、一心不乱に阿弥陀の名号を称え、自力で回向することによって往生する、というものです。そうなると、われわれはすぐにこの「観経往生」、「弥陀経往生」を否定しなくなります。

注意したいのは、この「弥陀経往生」を述べる部分に、

定散自力（第十九願）の行人は、不可思議の仏智を疑惑して信受せず、如来の尊号をおのが善根として、みずから浄土に回向して、果遂の誓いをたのむ（『真宗聖典』四七三頁）

と、第十九願と第二十願が、別々ではなく、ともに問題とされていることです。「定散自力の行人」とは、阿弥陀如来が、お念仏さえすれば必ず救うと言っているのに、よい人間にならなければいけないと思っているわれわれのことです。それが実は「疑惑」ということです。

三願転入とは

自分がよいと思つていふことをする、それは「自分」があるということであつて、それこそが「疑惑」なのです。「自分」というのは、さまざま価値観・善悪が束になつてできあがっているわけですから、そもそもわれわれは仏智を疑惑する存在なのです。私たちがものを考えるということが基本的に仏智疑惑であり、それは逃れられないことなのです。

わたしたちは「三願転入」を、疑惑や煩惱がだんだん無くなつていく過程と考えてしまいがちです。最初は『観経』にあるように、善を修め、お念仏もする。これが第十九願です。そして第二十願において、自力でお念仏だけ、そして最後に第十八願の他力の念仏に向かつていく。

しかし親鸞聖人は、そのようにおっしゃっていません。すでに見たように、第十九願と第二十願が一緒になつています。第十八願によつて第十九願・第二十願が位置付けられている。自力の称名と修善、修諸功德、というものが第十八願に摂め取られている。これが親鸞聖人の受け取り方なのだと思います。

『教行信証』「化身土巻（本）」には、

おおよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもつて己が善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず、仏智を了らす。かの因を建立せることを了知することあたわざるがゆえに、報土に入ることなきなり

（『真宗聖典』三五六頁）

とあります。

お念仏を称えることを自分の善根にし

てしまうから、仏智をさとることができない。第十八願が立てられたことも、他力ということもわからない。だから報土に入ることはない、とおっしゃっています。何の自覚もないということなのです。

そうでありながらも、いや、そうであるからこそ「論主（龍樹・天親）の解義」〔宗師（曇鸞・善導）の勸化〕を仰いで、自力の我々はその自覚のもとに第十八願によつて救われていくと、親鸞聖人は言われている。そう私は受け取っています。

真宗を学ぶことでわれわれは成長するのか

ある先生が「われわれは凡夫にまで成長して救われる」とおっしゃっています。したが、わたしはそうではないと思います。真宗を学ぶことで、「凡夫に成長する」「よくなる」というイメージがあるかと思いますが、進歩ということでは歴史や人間を考へるのが近代の特徴でしょう。そうではありません。煩惱の底の無い深みに少しづつ下りてゆくだけです。

自力で生きていくと知るのには、他力にであつたということなのです。他力によつてわたしたちは生かされていると知る。しかし次の瞬間には「わたしは自力ではなく他力で生きよう」と言つてしまします。言っている自分は自力です。結局は全てが自力なのです。

ですから、わたしたちには自力しかないこと知らされるということが、第十八願に出あうということです。第十九願・第二十願の生き方をしている。それを自覚する。だからこそ救われる。それが第十八願・本願に出あつたということです。そのように受け取つてきたのが大谷派の伝統だと思います。

（文責編集部）

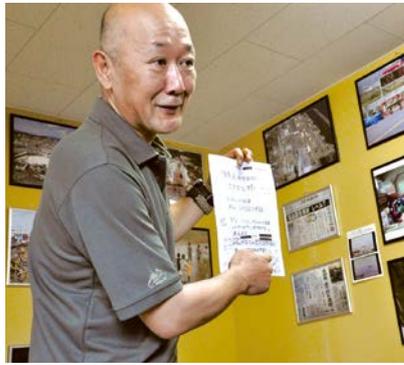
研究生現地研修

2014年6月4～5日

東日本大震災被災地を訪ねて

「忘れないでください」

さる六月四日～五日、教化センター研究生の東日本大震災現地研修を実施した。研究生は震災から三年を過ぎた被災三県を訪れ、それぞれの現実を生きている人々の声に耳を傾けた。その中で感じたこと、問われたことを後日学習会で語りあった。その一端をここに報告する。



原町別院境内に設置された福島事務所で、原発事故の被害と現状について説明を受けた。(福島県南相馬市)

それぞれの場所、それぞれの名前

「報道では、今、福島では」と伝えられるが、実際にはさまざまな町があり、地域によって、人によって、原発被害の状況も感じ方も違うことを知ってもらいたいと思います。福島事務所で伺ったこの言葉が忘れられない。

福島を「フクシマ」と受け取るのではなく、それぞれの場所、それぞれの名前、それぞれの人、それぞれの声があることを忘れずに、今後も知り続けていきたい。(第十期研究生 玉腰暁広)

私ひとりにとっての震災とは

震災の起こった三月十一日。私は父の三七日法要の準備に追われていた。報道を通じて現地の惨状が次々と伝えられる中、私にとっては現実味のない遠くの出来事ではなかった。数万人の他人の死よりも一人の肉親の死の事実の方が重く感じられたことを思い出す。このたび被災地を訪れ、震災に出会った全ての「ひとり」が、それぞれに異なる背景、事実、思いをもっていることをあらためて知った。現地に行く前の私は、その「ひとり」のことを全く想像できていなかった。そしてその「ひとり」の中に私自身も含まれていたのだ。今やっと、私にとって震災は他人事ではなくなった。

(第九期研究生 堂宮淳賢)

切実な願いとは裏腹に・・・

案内をしていたいただいた仙台教務所員の、「二〇二〇年の東京オリンピックの関係で、復興工事が進まなくなることが



津波被害の大きかった宮城県名取市閑上地区(日和山)。かつての街並みは消え、荒涼とした平野が続く。

心配されている」という言葉が印象に残った。もつと精力的に工事が行われていることを想像していたが、意外と少な

日程

第1日目(6月4日)

- 7:45 中部国際空港 出発
- 11:45 原発事故被害について
原町別院・現地災害救援本部「福島事務所」(福島県南相馬市)を訪問。木ノ下秀昭氏(別院職員)・木ノ下秀俊氏(仙台教務所嘱託)よりお話を聞く。
- 14:00 津波被害について
宮城県名取市閑上地区を視察。仙台教務所員の案内で「閑上の記憶」「閑上中学校」「日和山」などを視察。
- 16:30 宗派・寺院における復興支援について
現地復興支援センターにて、仙台教務所長と関口真爾氏(仙台教区徳泉寺住職)よりお話を聞いた後、講師と共に座談会。

第2日目(6月5日)

- 11:00 寺院の津波被害と復興に向けた取り組みについて
岩手県陸前高田市本稱寺跡を視察した後、仮本堂にて参拝、佐々木隆道住職よりお話を聞く。
- 12:30 陸前高田市の仮設商店街を視察
- 13:30 仮設住宅での暮らしについて
横田中学校仮設住宅を訪問。釘子克己氏(横田仮設副自治会長)のお話を聞いた後、陸前高田市気仙町などを視察。
- 20:25 仙台空港より帰路へ
- 21:25 中部国際空港 解散

ったこともこの言葉を印象付けた。研修の中で聞いた、「震災を風化させないために、見たこと聞いたことを周りの人に話してください」という言葉に、現地の方々の切実な願いを感じた。その願いとは裏腹に進んで行く時代の流れの怖さ、寂しさを感じた。

(第八期研究生 花園盛二)

寂しさとすれ違うトラック

閑上や陸前高田で見た荒涼とした工事現場で「寂しさ」を感じた。そこにあったはずの街が消え、生活の音に代わってトラックの乾いたエンジン音が響き渡る。山を切り崩し、途方もない長さのベルトコンベアで土を運ぶ陸前高田の風景からは、「復興」の実感がわかない。先の見えない荒涼とした景色とエンジン音にやりきれなさが込み上げてきた。

(第九期研究生 田島晶)



ご家族と寺院を津波で流された佐々木住職は、ご自身のこれまでの経験を、自らに刻み込むようにお話ししてくださいました。(岩手県陸前高田市 本稱寺仮本堂)

緊急時に備える

震災当時、電気・ガス・水道の止まった仙台市内の寺院の様子、震災に備えておく便利なもの、日頃の人との繋がりが緊急時にどれだけ助けとなるのかなどを聞いた。今まで危機意識が低く、最低限の物しか準備していなかったが、もっと緊急時に役立つものを用意する必要があると感じた。そしてお寺の備えを改めると同時に、いざという時の対策を家族や近所の人たちともっと話し合っておかなければならないと思った。

(第八期研究生

石原唯和)

「復旧」から「復興」へ

「私は息子と娘に、思い切り泣かせてやりたかったんです」。本稱寺住職・佐々木隆道さんは、避難先の厳しい生活の中で涙をこらえて眠りにつく二人のお子さんを抱いた思いをこう語った。まるで昨日のこのように鮮明に、しかし淡々と語る佐々木住職のその言葉に、私の思い違いに気付かされた。「復興」とは傷ついた町の形を取り戻すことでなく、そこに生きる人達を深い悲しみの中から「復たたび興していく」ことではないだろうか。誰もが思い切り泣き、笑える未来を今において私たちは問われている。

(第九期研究生

荒山優)

研究生現地研修を終えて

このたび研究生と被災三県に赴いた。訪れるごとに、現地の風景は少しずつ変化していった。人の心も同様に、時とともにその時感じた痛みや悲しみを忘却していく。それゆえ現地の人たちは、出あった人に伝え続けることによって繰り返し震災を心に刻みつけていた。

宗派は震災後、長期的な支援を視野に情報収集、物資やボランティアの受け入れをすべく「現地復興支援センター」を仙台教務所内に開設し、今年五月には原

悲しみの中の笑顔

避難所でリーダー的役割を担われた陸前高田市の釘子さんからは、私の想像を超える過酷なお話を伺った。しかし過酷なお話とは裏腹に終始笑顔で語る釘子さん。その顔は、現状から目を逸らさず前を向いている顔だと感じた。別れ際に釘子さんから握手を求められた。日に焼けた分厚い手のぬくもりは「決してこの震災を忘れないでくれ。ここで俺たちは復興に向けてやっていくんだ」というメッセージを私に伝えてるように感じた。



横田中学校仮設住宅の自治会長を務める釘子さん。震災当初避難所と今の仮設住宅について伺った

(第十期研究生
菱川俊)

町別院内に「福島事務所」を新たに開所した。今なお苦しむ人たちの悲しみを聞き伝える場となり、そこでの出会いがそれぞれのいのちを問うご縁となるように。『忘れない』ということから『忘れられない出会い』となるように。現地復興支援センターでは、視察やボランティアのコーディネートをはじめ、宿泊・案内・機材の貸し出しを行っています。「現地へ身を運びたい」という方は、下記までお問い合わせください。

(研究員 大河内真慈)

【視察、ボランティアに関するお問い合わせ】

東日本大震災現地復興支援センター

仙台市宮城野区小田原1丁目2番16号
(仙台教務所内)

TEL: 022-297-2824 FAX: 022-297-2827
E-mail: otaniha-f.s.center@watch.ocn.ne.jp
WEB: http://fsc.higashihonganji.or.jp/

福島県にお住まいの方への支援として「飲料水」の提供を呼びかけています。ご協力をお願いします。内容量や規格は問いません。



街全体をかさ上げするため、周囲の山を削り巨大なベルトコンベアで土が運ばれている。(岩手県陸前高田市)

大谷派の近現代史

2014年8月6日

平和問題公開講座抄録

「ヤスクニの闇へ」

日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会委員

辻子 実氏

教化センターは八月六日、辻子実氏（日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会委員）を講師に平和問題公開講座「ヤスクニの闇へ」を開催しました。当センターの活動内容を一般に公開し、現代的な問題と向き合っていくのかという課題を共有することを願って企画しました。キリスト教徒である辻子氏は、平和を求める信仰上の理由から靖国神社に疑問を持ち、首相の靖国参拝に反対する「ヤスクニ裁判」などに関わってきた実践家です。「靖国神社とは何なのか？」という原点を確認しながら「ヤスクニの闇」について説明いただきました。

【原爆と靖国神社祭神】

本日八月六日は、広島に原爆が投下されてから六十九年目です。被爆死者の靖国神社合祀は、ヤスクニの問題を考えるとき、非常に示唆に富むと私は思っています。まず取り上げたいのは、被爆死者と韓国人祭神の話です。

そもそも靖国神社には一八五三年以降の「英霊」二四六万六千余人の「日本人」が合祀されています。そのうち、朝鮮半島出身者約二万一千人、台湾出身者約二万八千人が祭神として合祀されています。これについて、一九七八年当時の靖国神社権宮司の池田良八は、「戦死した時点では日本人だったのだから、死後日本人でなくなることはありません。（中略）内地人と同じように戦争に協力させてくれと、日本人として戦いに参加してもらった以上、靖国に祀るのは当然だ。台湾でも大部分の遺族は合祀に感謝している」と発言しています。つまり、靖国

神社は植民地の方々を「台湾及び朝鮮半島出身者」という表現を使って、「日本人」として合祀しているのです。しかも、遺族の了解を経ずに合祀をします。勝手に合祀されている遺族の心情は察するに余りあります。

【韓国人の公族の合祀】

李鍋（りぐう／イ・ウ、一九二二年―一九四五年）という人がいます。「大韓帝国皇帝」の流れをくむ彼は、公族の身分を与えられています。皇族の皇ではなく、公式の公です。日本は、「韓国併合ニ関スル条約（日韓併合条約）」で朝鮮李王家一族に、王族と公族の身分を与えました。王公族は、皇族と同様に戸籍法令の適用を受けなかったため、李鍋は、創氏改名政策の対象になっていません。李鍋は一九二二年に、十歳で日本へ渡って学習院初等科に入学、その後、陸軍中央幼年学校を経て、陸軍大学校（五四期）を卒業しています。彼は、日本の皇室関



係の女性との結婚を強要されるのですが、それを拒否して親日派の娘（朴賛珠）と結婚しています。当時、朝鮮王公族で日本人と結婚しなかったのは李鍋だけです。

広島に原爆が落とされた時、広島に置かれた第二総軍の教育参謀中佐だった彼は、司令部への出勤途中に被曝し、翌七日に死亡しました。死後、陸軍大佐に昇進しています。八月十五日午後ソウルで陸軍葬として行われました。そして、公務中の戦死として合祀されました。

『靖国神社・遊就館・目録』（二〇一四年版）には、「二柱の皇族」すなわち、



李鍋の戦死を伝える当時の新聞（『毎日新報』1945年8月9日）

北白川能久と北白川永久の二人の皇族の事例は、展示説明より詳しく載せられています。李鍋のことは全く触れられていません。

【子どもの合祀】

合祀基準について触れておきます。戦死と認定された軍人が合祀されていることは知られていますが、子どもたちが合祀されることもありました。魚雷攻撃で沈没した対馬丸に乗っていた疎開途中の七百人の沖繩の児童等です。沖繩のひめゆり学徒隊は、犠牲者の名簿を作成し厚生省に遺族年金を申請したところ、名簿が靖国神社に渡り「陸軍軍属」として合祀されました。靖国神社は、少年少女向けパンフレットで「軍人ばかりでなく、女性の神さまが五万七千余柱もいらっしやいます。みなさんと同じくらしいの少年少女や生まれて間もない子供たちも神さまとして祀られています」と誇らしげに書いています。

しかし、アジアでの犠牲者はもちろん、空襲で亡くなったり、原爆の犠牲になっただけの戦争犠牲者の大多数は祀られていません。靖国神社に合祀される人と、されない人の選別基準の説明はなされていません。

【合祀基準と政治】

靖国神社への合祀は、国に「戦没者」と認定され、遺族年金支給対象になると、その名簿が靖国神社に送られ、靖国神社がその名簿をもとに合祀するという仕組みになっています。ですから、現在の合



祀基準は、遺族が戦傷病者戦没者遺族等援護法などの適用を受けた戦没者といえます。

遺族は、地元国会議員を通じて、政府や厚生労働省に遺族年金支給や靖国神社合祀を請願します。遺族年金支給や靖国神社合祀が決定すると、政府や厚生労働省は、まず、地元国会議員にこの決定を伝えます。それだけの事ですが、政府や厚生労働省は、国会議員に貸しを作れません。議員は、遺族会に自分の手柄として決定を伝えます。そのため、日本遺族会は総力を挙げて推薦政治家に票を集め国会に当選させるのです。

日本遺族会が政治力を見せつけたのは、二〇〇一年四月二十四日の自民党総裁選挙です。総裁選は小泉純一郎・二九八票で、次点が橋本龍太郎・一五五票でした。最大派閥を後ろ盾に持つ橋本龍太郎が破れて、派閥のボスでさえなかった小泉純一郎がどうして自民党総裁になれたのでしょうか。小泉は総裁選直前

に、日本遺族会幹部に電話をして「八月十五日に靖国神社参拝をします」と公約したのです。日本遺族会会長を歴任した橋本龍太郎は、アジア諸国との関係をおもんばかって、靖国神社参拝を遺族会に公約しなかったのです。これが「小泉ヤスクニ違憲参拝」の舞台裏であり、ヤスクニの政治利用です。

【泉水隆一のヤスクニ論】

靖国神社を一言でいうと、軍国主義神社であり、侵略神社です。私がこう言うのと、反ヤスクニ派はそれしか言えないのか、と思われるでしょう。では、目先を変えて、靖国神社護持の急先鋒の一人と言える、靖国神社創立一三〇（一九九九）年記念事業の一環として制作されたドキュメンタリー映画『凛として愛』を監督した泉水隆一氏のヤスクニ論をご紹介します。と思います。

泉水は、「靖国神社は、サヨクが云うが如く、「軍国主義」そのものであり、「戦争」を肯定し、王事に斃れ国難に殉せし殉義死節の精神を「雄々しく語り」、なおも一層、後輩の軍人・国民が志気を高め振作するために、「より神々しく美化」し、「祭神の功績を欽慕」するための神社」であると、断言しています。さらに、「日本軍を祀っている神社ではなく、皇軍兵士の武勲を祀っている神社なのです。つまり天皇の軍隊の神社」、「(皇軍) 軍人が(皇軍) 軍人を祀り、(皇軍) 軍人が奉慰顕彰する神社であって、戦前に「慰霊」という考えはなく、皇軍兵士の雄渾・武勲の「魂」をお祀りしているのであって、戦死

者を祀っている訳ではないことなどを指摘しています。

また、靖国神社境内に建っている東京裁判で判事を務めたバル判事の顕彰碑に對して否定的です。「バル判事は、南京事件は認めていた。南京だけでなく、通常の戦争犯罪が、日本軍にあったことを認めている。日本兵による暴虐な仕打ちは、否定できないほど圧倒的な立証があると、幾度と無く判決書で述べている。だから、靖国神社境内にバル判事の顕彰碑を建てるな!」と言っています。

非常に判りやすいヤスクニ論だと思いませんか。

【鎮霊社】

二〇一三年十二月二十六日の安倍靖国違憲参拝の特色は、わざわざ境内にある「鎮霊社」という小さな祠に参拝した点にあります。鎮霊社は、「靖国神社本殿に祀られていない方々の御霊と、世界各国すべての戦死者や戦争で亡くなられた方々の霊が祀られています」(パンフレット)や「すぐに大百科」と説明されています。

しかし、A級戦犯合祀を強行したことで有名な松平永久(元宮司)は、「鎮霊社に触れることを厳禁と言っています。松平の次に宮司に就任した大野俊康も『宮司通達』(二〇〇三年六月一日)まで出して、「鎮霊社を今後共、現状のまま、密かに奉斎し続けることを見解とする」と言っています。保守派重鎮の小堀桂一郎までもが、「鎮霊社は即ち淫祠である、と嘲るであります。實に言ひにくいこととでありますが祭祀といふ當為の道理と



2013年12月26日に安倍首相が参拝した鎮霊社

してはさういふ結論になるのであります」と、罵倒しています。

「世界各国すべての戦死者や戦争で亡くなられた方々」ということは、アドルフ・ヒトラーやベニート・ムッソリーニ、サダム・フセイン、ウサーマ・ビンラディン、そして、アウシュビッツなどの強制収容所で殺されたユダヤ人や南京大虐殺の犠牲者が、同じ一枚の座布団の上で座らされ、慰霊されていることになりません。安倍首相は靖国神社参拝を、「平和を祈念するための行為」と言っています。が、慰霊ということは文字通り、死んだ人や動物の霊を慰めることです。ヒトラーを慰霊するということは、第三帝国の野望が頓挫したことを慰めている、と言えないこともありません。

いずれにしても首相の靖国参拝は、単なる参拝ではないのです。「皇軍に見習え、皇軍に続け」と語る効果を生み出すのです。いつか来た道を知って、再び同じ道を行くことがないように思っています。

浪江焼きそばの「お取次ぎ」

— 研究生が東別院御坊夏まつりに参加



今年も御坊夏まつりに、教化センター研究生一同で飲食ブースを出店した。福島県浪江町のご当地グルメである「浪江焼きそば」を提供した。うどんのような太麺に、濃厚ソースが絡み合う「浪江焼きそば」は、一度食べると病みつきになる味わいである。一般的な焼きそばとは違うので、最初店の前を通りがかる多くのお客さんたちは戸惑いを隠せない。「おいしいよっぺん食べてみや〜!」と大声ですすめる研究生一同。それはこの焼きそばの本当のおいしさを自分たちが心の底からいただいているからである。これは仏法をお取次ぎしていくことと似ているなあと感じた。この私自身が本当に心の底からありがたいといただいているものでなければ、相手にも伝わらないと思う。鉄板の前で大粒の汗を流しながら、作った焼きそばを通して、あらためて「仏法のお取次ぎ」という課題を考えさせられた。

(第9期研究生 たみや あつり 堂宮 淳賢)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

これまで教化委員会(組織教化部門)にて企画・運営・実施されてきた聖典研修が、今年度から教化センターの研修業務として実施されることとなりました。

学教的視点と儀式の側面から、『仏説阿弥陀経』が私たちに何を問いかけているのか考察していきます。

- 期 日： 第1回 9月19日①終了 第5回 2月19日(木)②
第2回 10月30日(木)② 第6回 4月16日(木)②
第3回 12月4日(木)② 第7回 5月15日(金)①
第4回 1月23日(金)① 第8回 6月18日(木)②

- 講 師： ①竹橋 太氏(儀式指導研究所研究員)
②廣瀬 惺氏(同朋大学特任教授)

- 日 程： 午後6時～ 講義(80分)、休憩(20分)
午後7時40分～ 全体攻究(50分)
午後8時30分 閉会

- 会 場： 名古屋教務所 1階 議事堂

- テキスト： 『真宗聖典』

- 聴講料： 各回500円 ※全回券3500円
※教師陞補のための聴講証発行研修

INFORMATION

教化センター日報

■2014年6月～8月

- 6月4～5日 研究生・現地研修「被災地一泊研修」
- 13日 研究生・学習会「被災地一泊研修 事後」
HP「お東ネット」会議
- 16日 研究業務「平和展」学習会
HPリニューアル会議
- 18日 「親鸞聖人ノート」改訂打合
- 20日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え③)」
- 24日 教化センター運営会議
- 30日 研究業務「平和展」学習会

- 7月7日 研究生・学習会「平和問題①」(新野研究員)
- 14日 研究業務「平和展」学習会
- 25日 研究生「第8期生 修了式」
- 28日 研究業務「平和展」学習会
- 30日 研究生・実習「真宗門徒講座(宗祖親鸞聖人 生涯と教え④)」
- 8月4日 研究業務「平和展」学習会
- 6日 研究生・学習会「平和問題②」(辻子実氏)
平和問題公開講座「ヤスクニの闇へ」開催(辻子実氏)
- 9～12日 「2014 あいち平和のための戦争展」参加
- 23・24日 御坊夏まつり 出店(研究生有志)
- 25日 研究生・学習会「平和問題③」(新野研究員)
- 27日 研究生「第11期生 面接」
- 28日 研究生・学習会「真宗本廟一日参拝 事前」

第11期研究生あいさつ

大学卒業後、自坊で勤めるようになり、門徒さんからいろいろ質問されることがありましたが、自分の勉強不足もあり、自信を持って答えることができませんでした。環境を変えて一から学ばせていただきたいと思い研究生を志望しました。3年間という短い期間ですが、先輩方と共に成長させていただきたいと思っております。よろしくお祈りします。

なべの りょうご
鍋野 了悟(第6組 雲願寺)



この度、教化センター研究生に採用されました、松山と申します。大谷派教師としての私には、様々な責任と義務があると考えています。宗門の一員として、真宗の教えを学び、そして社会における課題と向き合い周囲と関わりながら、その責務を果たしていけるよう、努力して参ります。どうか、よろしくお祈り致します。

まつやま こうげん
松山 公顯(第2組 光泉寺)

《お詫びと訂正》

『センタージャーナル』89号(2014年6月発行)

「震災とお寺・坊さんの役割」に誤りがありました。

【訂正箇所】5面下段12行目

誤「太田祖電氏」 正「太田祖電氏」

訂正して、読者の皆様ならびに関係各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

《編集子雑感》

リニューアルして1年が過ぎたウェブサイト「お東ネット」や名称変更した「お東ネットブログ」に加え、インターネット上で交流することができる「フェイスブック」や「ツイッター」という新たな手段を得た名古屋教区、名古屋別院。

当紙「センタージャーナル」をはじめとする教化伝道・広報を担ってきた従来の媒体との「メディア(媒体)ミックス」の進展が問われているのは分かるけど…。頭の中ばかりがミックス(混乱)して、持ち腐れになってしまわないか。そうならないよう、みなさまのアクセスという名のご指導・鞭撻をお待ちしています。(り)

お知らせ

〈退職〉 研究員 前田 健雄
業務嘱託 小笠原智秀

〈新任〉 研究員 大河内真慈
(担当：現代社会と真宗教化)

■教化センター

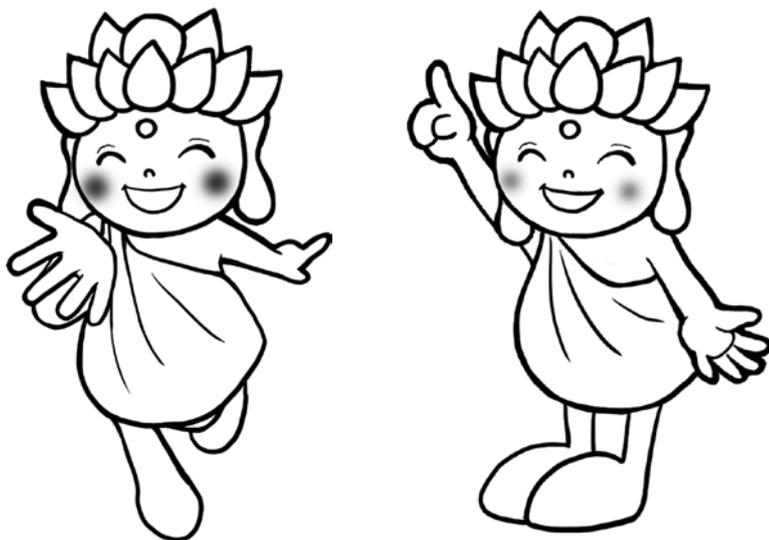
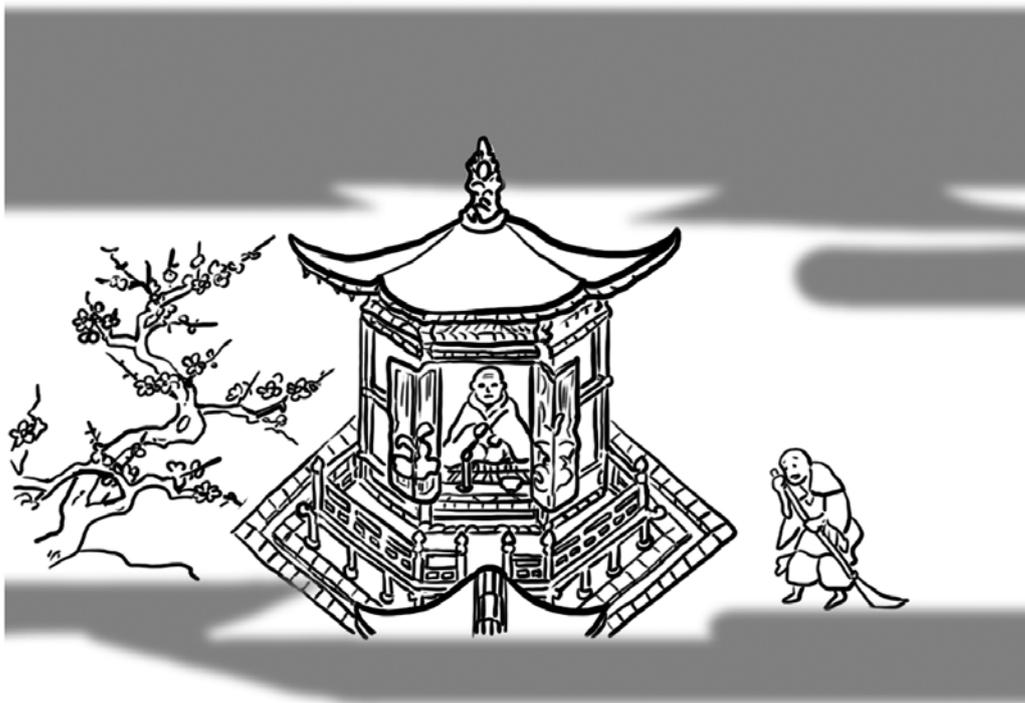
〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

■リニューアルしました。名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- ・データを希望される場合はお問い合わせください。
- ・差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。